
C's

xai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C's

【Nコード】

N0927E

【作者名】

xai

【あらすじ】

平凡な日常を送っていたシアルという少年は、突然何もわからぬままその日常を破壊されてしまった。それでも彼は必死に生きようとした。孤独さと悲しみに耐えながらも彼は人を信じる事をやめなかった。しかし運命という歯車は回り続け、いつしか自身でも気づかぬまま大きな戦いへと巻き込まれていく。その運命に翻弄されながらも立ち向かう主人公。その行末はまた、この作品は挟間猩先生の『悲しみの血呪われた涙』とリンクしております。興味を持たれた方はぜひ合わせてお読みください。

プロローグ（前書き）

初作品で稚拙なところがあると思いますが、頑張って書いていこうと思います。

プロローグ

なんでこんなことになっちゃったんだろう。

雲ひとつなく、大きな月が空に浮かび、世界をぼんやりと照らす夜。そんな夜でも木々の陰によって闇に包まれている森の中で彼は一人、その小さな身体を震わせながら考えていた。

今日はいつもどおり魔法のお勉強をして、それが終わったら友だちと遊んで、それも終わったらお家に帰って、いつもどおりでふつうだけどいつもどおり楽しくって、変なところなんてなかったのに。

何故このような事態に陥ってしまったのか、それを考えることで少しでも現実から離れたくて。

もしかして、おそくまで起きていたからなのかな。おかあさんの言うことを聞かないで夜更かしをしたから神さまがおこってこんなふうにしちゃったのかな。今から寝ればゆるしてくれるのかな。

しかし、そんな甘い考えは『現実』という名の力によって容赦なく潰されてしまう。

彼自身が考えているように彼は今までと何ら変わらぬ日常を送っていただけであつたが、運命というものは時に甘美で時に残酷で

この時は彼に対して残酷な一面を見せていた。

普段どおり、平和で幸せな毎日を送っていた彼は今 追われていた。

追ってくる相手の素性も知らず、自分が追われる理由もわからずに。

それでも彼はただ逃げることしかしなかった。そうすることしか

できなかった。

そして現実逃避を始めていた彼に、遠くから近づいてくる気配と音があつた。

この暗く静かな、動物などの気配すらほとんどしない森ではそれはあまりに目立っていて、彼を一気に現実に取り引きずり戻す。

はやく……早く逃げなきゃ……！

単純明快なその思考に身体を支配させ、彼はまたがむしやりに逃げ出した。

最早自分がどこにいるのか、どこに向かっているかすらわからず、身体に当たってくる葉や枝も気にせず、残酷な運命からも逃げ出すように。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。小説は普段から読んでいるのですが、こうやって自分で書くのは初めてでとても緊張しております。稚拙な点、至らない点が多々あると思いますので、そういったところをご指摘いただければ嬉しく思います。これからも頑張つて更新していきますので、どうかよろしく願います。

第一話：Calamity Start

コトン。

その音はとても小さく、普通ならば注意しなければ聞こえることさえしないかもしれない。

しかしこの場所、所狭しと棚が並び、その一つ一つにぎっしりと本が詰まっている図書館ではよく響き、そこに居るものの耳にはつきりと届く……筈なのだが、この図書館には人影が一つもなく、明かりすらついておらずに宵闇に溶け込んでいた。

そんな中、現在の図書館で唯一その音を聞いた存在があった。それは自身が発生させた音にも関わらずびくつと体を跳ねさせると、そこで動きを停止させた。

しばらくその状態のまま周囲に注意を払っていたが、自分以外の気配がないとわかると再び静かに動き出す。

こんな時間に図書館に訪れることは普通ではない。しかしその目的は至って正常であり、本棚からそつと一冊の本を出すとその場で読み始めた。

その本はこの世界の歴史について記されたもので、どこでも見かけることができるような本であった。

我々が存在するこの世界は、「マージア」という名である。

ここには古来より魔法というものがあり、文明と共に成長していった。この世界がどのくらい前に生まれ、どのくらい前から魔法というものが生まれたのか、それを調査する学者は多々として存在するが、未だに決定的な証拠は見つかっておらず、大半は学者達の仮説に留まっている。

魔法を使用することが出来るものは極少数である。その中で遺伝的に魔法を使えるものがほとんどであり、その他に僅かではあるが魔法を使えない両親からでも先天的に魔法が使える子供が生まれた

り、何らかの手段を用いて後天的に魔力を得るものもいる。なお、前者についての理由は不明である。

ただでさえ数が少ない魔法使いであるが、歴史上に名を残す強大な力を持つ者 賢者と称される彼らの中には、精霊等の力を借り超常現象を起こすものすらいたという。

そして力を持つものが現れるということは、必然的に争いが起こるということである。

今に至るまで、戦争が勃発し終結。また勃発……このような循環が幾重にも繰り返されてきた。

その結果、現在のマージアには『軍事国家ティフォス』 『商業国エンポリア』 『魔導国シュール』の三ヶ国が存在する。

この中で最も強大な力を持つティフォスに対し、エンポリアとシュールは同盟国となり対抗している。表面上は均衡が保たれていると言えるだろう。

しかしある日、突然この均衡が崩れないという保障はどこにも無い。どの国も来るべき日に備え、軍事強化を行っている。

特に近代ではその均衡の崩壊 即ち、戦争へ加速していると唱える政治家や学者が増えてきている。

そのきっかけとなった出来事が『鬼械』プレシヤス・オルガノン、通称オルガと呼ばれる古代兵器の発見である。

魔力をあまり持たない魔法使いでも鬼械を用いることにより使用者と同等の魔法使い数人を相手に、互角以上の力を持って戦闘を行えてしまう。

鬼械が量産できれば、それは自国の軍備の増強へと繋がり 圧倒的な力を持って他国を制圧できることであろう。

だが未だに不明瞭な部分が多く、鬼械の製造に必要な莫大なコストや稼働に必要な高純度の『魔導石』、そしてそれを扱うことができる人間が少数であることも相まって、どの国も未だに量産までは至っていない。

魔導石自体は珍しくなく誰でも扱うことができるのだが、数少な

い高純度の魔導石ともなると魔力に限らずその魔導石に選ばれた人間にしかその魔導石を扱うことはできないからある。

鬼械の量産と言わずとも、どこか一つの国が他国を圧倒的に凌ぐほどの鬼械を手に行うことに成功したのなら、この世界はその国が掌握すると言っても過言ではないだろう。

「……ふう」

この本を何度も読みかえしているのか、かなりの速さでページを捲っていたその影はさほど時間をかけずにその本を読み終わり、そつと閉じてまた元あった場所へと本を戻した。

「木を隠すには森と言っし、こんなありふれた本にこそ暗号とか隠されていると思っっていたけど……やっぱり甘いのかなあ」

そう誰ともなしに呟くと本棚をざつと見渡す。

「この図書館にも手がかりは無し、と」

やや落胆した様子で自分が侵入してきた窓へゆつくりと戻る。

しかし、貸出力カウンターと思われる場所の周辺にたくさん貼られている催し物やお知らせなどが記された紙の一枚に目を向けると、その足を止めて読み始める。

その視線の先、文字だけで構成されている飾り気も何もない紙にはこう記されていた。

『個人蔵書、一般公開のお知らせ』

この度、私が収集している貴重な文献などの一般公開を行います。学生さんから専門家の方々まで、どなたでも歓迎いたします。興味を持たれた方はぜひお越しください。なお、お越しのさいには……』

そこからは自宅の住所や個人の書庫であるため狭いので事前に予約を入れてもらえば順番にもてなす、といったことが記されていた。しばらくその紙を眺めていた小さな影は、

「……よし」

そう呟くとまた、ゆつくりと歩き始めた。そしてほんの少しだけ開けてあった窓に手をかけると、音もなく図書館から出て行った。

第二話：Cat and an old man

暑すぎることもなく寒すぎることもない、穏やかな天気に包まれた日の昼下がり。それなりに栄えている街の外れに、一軒の家があった。

お世辞にも綺麗な家とは言い難く、建築されてから数十年は経過していそうな木製のやや小さめの家で、玄関の扉は開放されていた。その家の中では住人と思われる老人がゆったりとした椅子に腰かけて日に当たりながらすやすやと眠っていた。

そしてそんな静かな家に、さらに静かに　ほとんど無音で入っていく影があった。

それは誰かを探すかのように視線を動かしながらゆっくりと家の中を進んでいき、寝ている老人を発見するとすぐ傍まで近づいた。

「……起こしていいのかな」

そう呟くと今起きてくれるといいのになあ、などと言いながら老人の周囲をうろろし始める。

しかししばらくしても老人が起きないとわかると、話しかけた。

「あの、すみません」

されど老人の反応はなく、先ほどと変わらず気持ちよさそうに眠っている。

「もしもし、あの、えと、起きてくれないでしょうか……」

今度はちよつと大きめの声で話しかけたものの、怖気づいているのか最後には音量が下がってしまう。

それからまた起こそうと何度か声をかけたものの声が小さいのか、それとも簡単に起きないほど老人が深い眠りにについているのか……一向に起きる気配はない。

「よし」

すると、何か意を決したように老人の座る椅子の裏へと周りこんだ。そこで椅子の脚に手をかけると、ゆっくりと揺らし始めた。

始めは非常に小さい揺れだったものの、その揺れは少しずつ強くなっている、

「ん……なん、だ……？」

揺らし始めてから数分が経過した頃、ようやく老人が目覚めた。そしてすぐに自分が座る椅子が何故か揺れていることに気づくと、揺れの原因を探るためにやや警戒しつつ立ち上がり、周囲へと目を向ける。

「誰か居るのか？」

少し緊張した面持ちで自分の視線が届かぬ場所へとそう声をかけると、思ったよりも近くから声が返ってきた。

「ごめんください」

しかしその声が返ってきたのは家の中からではなく、窓のほうから聞こえてきた。すぐさまそちらへと老人が目向けるとそこには誰も居なかった。

「……………」

老人は驚いた表情をしながらそこを見つめる。しかし、驚いた理由はそこに誰も居なかったからではなく、

「今日の朝ご連絡を入れ、少し遅れてしまいましたがこの時間に蔵書の閲覧の予約を入れたものです」

すらすらと自分に人の言葉で話しかけてくるものが、人間ではなく一匹の小さい白猫であったからである。

そしてその白猫は自分が驚かれていることに気づくと、間髪入れずにまた喋りだした。

「えっと、僕の説明もしたいですし……とりあえずお邪魔してもよろしいでしょうか？」

数分後、老人は落着いて、また自分が先ほどまで寝ていた椅子に腰かける。対面には例の白猫。

そして自分を興味深く観察していた老人に向かって白猫が話しか

けた。

「もう話しても大丈夫でしょうか？」

「……あ、ああ。大丈夫です。よろしく願います。」

「では、自己紹介からしますね。僕の名前はシアルっています。今はこんな姿ですけど……元々は人間でした」

その過去を話すのは辛いのか、後半は少し低めの声になっていた。
「それは薄々感じておりましたが、未だに自分の目を信じる事ができません……」

しかし、それでも目の前の猫に対しての興味は尽きないらしくその外見に似合わぬ生き生きとした目で白猫を見つめる。

「はい、それは仕方ないことだと思います。本当に珍しい呪いらしいですし」

「……呪い？」

その言葉を聞くと、老人は眉を寄せ、あからさまに怪訝そうな顔をする。そしてまたすぐに聞き返す。

「あなたが猫の姿をしているのは呪いのせいなのですか？ 姿を変化させるなどの魔法ではなく？」

「はい、確かに呪いです。僕はこの姿になってから今まで一度も人間に戻ったことはありませんし、色々と試してはいますが戻ることもできません」

すると、老人はそこで一度会話を切って考え込んだ。白猫は続けて話す。

「他にも魔力が体の中に無理矢理抑えられているような感覚もしますし……」

そこまで話したところで老人が手のひらを見せて話を中断させ、そのまま口を開いた。

「私は、私は、あなたがその姿になっている原因は魔法と判断していました。その理由は犯罪者や逃亡者であり、人前に自分の姿を表すことができないからだ、そう考えておりました」

「そして僕があなたの貴重な本などを盗りにきたのかもしれない

そう考えていたのですね？」

「ええ」

それを隠そうとすることすらせずに老人がはっきりと答え、また即座に喋りだす。

「しかし、すぐに間違いだと気付きました。盗むのなら私が眠っている間に盗んでしまえばいい話です。すると猫の姿をしている理由がわからなくなる、それを考えていたらあなたのほうから教えてくれました」

そこで一度喋るのを止め一呼吸置くと、

「そして私はあなたに興味が湧きました。もしかすると、あなたの事情を考えるとこれはとても失礼なことかもしれない。それでも、それでも私は……あなたが呪いにかけられた理由や、経緯をぜひ知ってみたいと思います。話してくれますか？」

全く悪そうな素振りを見せずに、やや興奮した面持ちで一氣にまくし立てた。

それに対して白猫は気分を害した様子はほとんどなく、目を閉じて静かに頷く。

「もちろんお話します。むしろ、あなたのような人にはぜひとも聞いてほしかったです」

「ありがとうございます。それでは……お願いします」

「……この話は僕が子どもの頃、ある夜突然自分が住む村に見知らぬ人物が来訪したことから始まります」

話し慣れているのかほとんど詰まることもなく、親が子供に昔話を聞かせるように、静かに語りだした

第三話・Cursed past - 1 (前書き)

過去のお話ですが、今までとは違い一部分、残酷な描写が入ってしまっています。苦手な方はご注意ください。
また、長くなってしまったので二部構成です。

第三話：Cursed past - 1

とある森の奥深く。人々の目から逃れるようにひっそりと、その村は存在した。

建物は少なく、それに伴って住んでいる人も少ない。そもそも、この村を知っているもの自体が少数であろう。

世間から隔離されているが、逆に言えば世間の喧噪などからは離れることができており、静かで長閑で平和な独立した世界がそこにはあった。

そしてそんな村が迎えたとある夜。月が綺麗で、時折周囲の森の中からふくろうの鳴き声が聞こえてくる、本当にいつも通りの夜だった。

しかしその平和はいとも簡単に、理不尽なほどあっさりと破壊される。

周りの家などと比べるとかなり大きめの建物。子供が勉強をするために集まったり、何らかの集会の時に使われたりする。この村で公共のものであるその建物に、ゆっくりと近づく人影があった。森から出てきたその影はローブを着ており、それは森を通ってきた割には不自然なほど綺麗であった。

深く着たローブの隙間から時折月光に照らされる顔から、男であることがわかる。

そしてその男は建物の入口までやってくとそこにあつた扉を叩いた。

今日は何かの集まりでその建物にはこの村のほとんどの住人がおり、外からでも誰かがいるということがすぐにわかったからであるう。

しかしその叩いた音に気付かなかったようで、人は出てこなかった。もう一度、先ほどよりもやや強めに扉を叩く。

今度は叩いてしばらくすると、扉の反対側に近づいてくる人の気

配があり、

「どなたですか？」

そしてそんな声が聞こえてきた。男はすかさず返す。

「夜分遅くに申し訳ありません。森の中で迷ってしまい、この村に辿りつきました。もしよろしければ朝までどこかにお泊めしてもらえないでしょうか？」

「……少々お待ちください」

そんな返答があり、またその人の気配はなくなる。恐らく、他の住人に相談しにいったのだろう。

またしばらく待つていると、再び人がやってきた。

「申し訳ありませんが、お泊めすることはできません。この森には危険な生き物も少ないですし、近くの町までの道まででしたらこれから案内いたしますが、どうしますか？」

すると今度はすぐに男は返事を返さなかった。何か考えているようだ。

「……わかりました。それでは、お願いできますか？」

「かしこまりました」

即座に扉の鍵が外される音が聞こえてゆつくりと扉が開かれ、中から女性が現れ、

「ではご案内いたしますので……しっかり着いてきてください」

それはその女性の最後の言葉となった。

案内をするために女性が男に背を向けて歩き出そうとした途端、音もなく抜かれた剣が女性の後ろから首を刎ねたからである。

そしてその男は動かなくなった女性の体を掴むとそのまま強引に引きずりながら後ろを振り返り、自身と扉の間に挟むように持ち上げる。

「アイル空壁」

そう呟いた瞬間、建物の中から男へと閃光が走り、衝突した瞬間衝撃が発生し轟音を響かせた。

「やれやれ、やっぱり一筋縄じゃないか……」

しかしそんなことも大して気にした様子はなく、無傷の男は飛び退り建物から離れる。先ほどまで男がいた場所には女性がばらばらになって散らばっていた。

少しすると、先ほどの閃光により吹き飛んだ扉の跡を通って複数の人間が出てきた。

「ぬう、一筋縄ではいかないようじゃな……」

男が生きていることを確認すると、先頭に立つ初老の男が対峙する男と同じことを呟く。その表情からはかなりの緊張感が見て取れるが、

「酷いことするな……初めから俺と一緒に殺す気だったでしょ、あの。綺麗な人だったのになあ」

向かう相手の男は緊張感のかけらもなく、軽口を叩いているばかりである。

「その様なことは我々が知ったことではない。貴様も死ねばあの世で会えるのではないか？」

「いや、俺はまだ死にたくない。あの程度の人ならまだ生きてれば会えそうだしね」

「それもそうだな。死ぬ覚悟はできているな？」

「うわ、理不尽。それはこっちの台詞なのに」

「この数の差がわからんのか？それとも貴様は数を数えることすらできないのか」

「俺が自分一人だけで来たとしても？」

その言葉を聞くと、村の住人たちがどよめく。先頭の男を除いて。「この状況でよくもそのような輩を感知する結界には一人しか反応がない」
「へえ、そんな魔法があるんだ。覚えておかなくっちゃね」

「冥土の土産にでも持ってゆくがよろう。では、死ぬがよい」
その言葉を言い終わると同時に、先頭の男を始めとして建物から出てきた人間全員が、一斉に杖のようなものを取り出して離れた男へと向ける。

そして次の瞬間、
またも閃光と轟音が村を包み込んだ

第四話：Cursed past - 2

しかし、男は倒れていなかった。

「な……！？」

対峙する初老の男の目が驚愕に開かれる。

驚くべきことはそれだけではない、次の瞬間にはその男の周りに居た人間が次々と糸を切らしたように倒れてしまった。

「あーあ、だから言ったのに」

笑みを浮かべながら、やはり緊張感のない態度で呟く男。

「貴様……何をした！」

それに相對するように、初老の男は更に緊張感を増幅させて睨みつける。

相手を警戒しつつ倒れた人間の脈を確かめるが、既に止まっていた。

「だあかあ、始めに言ったじゃない？ 一人で来るほど馬鹿じゃないって」

そう男が答えると森の中から複数の人影、そして人ではない「何か動くモノ」の影が出てくる。

「……………」

初老の男があまりの驚きに声さえ出せずに愕然としていると、

「んとな、知らないだろうから説明してやる。あの変なモノはオルガっていうやつだ」

男のほうから説明を始めた。

「なかなか便利なもので……ホラ、今からすること、よく見てるよ？」

すると、オルガと呼ばれたモノは近くにあった建物へ、恐らく人間でいう手のひらにあたる部位を向ける。

そして徐々にそこが周りの光を吸収するように輝き始め 一際強い光を放った瞬間、その建物が爆発した。

「ひやはははっ、さつきから驚いてばかりで大丈夫か？ ショック死とかしねえよなあ？」

相変わらずふざけた態度でいる男が、爆発に驚き茫然とオルガを見ている初老の男に話しかける。

「馬鹿な……今のは確かに魔法だ。なのに何故魔法が発動したのに魔力が感じられない……！？」

「おお、流石はかの有名な魔導士ウィデル様だ。こんな早く気付くとはな」

ウィデルと呼ばれた男は、自分をその名で呼んだ男を振り向く。

「貴様……私を知っていたのか」

しかしそう言われた男はそれを無視して、

「気付いたご褒美に教えてやる。オルガは魔法を発動する際に魔力を感じさせない。ま、俺達もその原理を理解しているわけじゃないが……面白いもんだろ？」

茫然とし続ける初老の男 ウィデルを楽しそうに、見下しながら喋り続ける。

「で、アンタの結界に感知しなかったのもオルガのおかげ。俺達に結界の効果を打ち消す強力な魔法をかけたワケだ」

話している間にも、オルガを始めとする森から出てきた人間達に村は破壊され、人々は殺されていった。

魔法を使い抵抗している者も少しはいるようだが、オルガの圧倒的な力により蹂躪される。

「あとはまあ、この村の住人を全滅させちまえば、目的のものもまとめて潰せるだろうと」

そう言いながら男は剣を抜き放ち、座り込んでいるウィデルへゆつくりと近づいていく。

「そういえば……さっきアンタは俺に冥土の土産とやらをくれていたな。お返しに、俺の名前を教えてやるよ。俺の名は グレニアだ」

すると、ウィデルはその名を聞いた途端に顔色を変える。

「グレニア……貴様、ティフォスの」

しかし、最後までその台詞を喋ることは叶わなかった。それまでとは全く違う雰囲気を纏ったグレニアが、神速の動きでウィデルの首を突き刺したからである。

「年は食いたくないな……。もう少し手ごたえのある相手だと思っ
てたんだが」

そしてとてもつまらなさそうに呟くと、剣を鞘に納めると仲間に加勢すべく、欠伸をしながら歩いて行った。

ほぼ同時刻。襲撃され、殺戮が繰り返される村から少し離れた、森の中に建つ小屋の中。

「おかあさん、どうしちゃったの？」

不安そうな子供の声が聞こえる。どうやら、早くに襲撃に気付いた村人がここまで逃げてきたらしい。

「大丈夫、大丈夫だから……。静かにしてなさい」

呼吸は乱れているものの、落ち着いた様子で子供に優しく返事をするその母親と、

「おい、早く手伝ってくれ。一人では流石に厳しいぞ」

やや慌てた様子でその母親に話しかける、父親と思われる人間がいた。

「ええ、わかっています。坊や、ちょっと待っててね」

愛おしそうに子供を撫でると、その場からそっと離れて夫の元へと向かう。

暗い室内が怖いのか、子供はその背中を追いかけて両親の後ろまでやってきた。

そして背中越しにその先を見つめると、光輝くよくわからない模様のようなものがあつた。

両親は熱心に何かを話し、その模様に時に何か書き加え、時に何か消していた。

その様子から邪魔をしてはいけないものだと感じ取り、近くにあった木箱に足を投げ出して座る。

時々村のほうから響いてくる轟音や地震のようなものに不安になりつつも、あの模様を見つめていると不思議と心が落ち着いた。そして5分ほど経過した時、母親にいきなり話しかけられた。

「坊や、これからの話をよく聞いてね」

返事をする代わりに、無言で頷く。

「今から、坊やにはこの中に入ってもらわね。そしたら……姿が変わっちゃうの。そういう魔法をあなたにかけるのよ」

何でそういうことをするのかは聞かなかった。そんなことを考える余裕もなかったからだ。

「姿が変わったら、ひたすら逃げなさい。あなたは賢いし、この森をよく知っているはずだからあまり迷うこともないはず」

何も考えることもできなかった。ただ、言われたとおりにすることが正しいことだとしか認識できなかった。

「それで逃げ切ることができたなら、この紙に書いている人を尋ねなさい。必ず力になってくれるから。わかったわね？」

その言葉になんとか頷いて肯定を示すと、母親は優しく微笑み、こつちへおいでと言いながら子供の手を引っ張った。

連れていかれた先にはやはりあの輝いている模様があつて、すぐ傍には父親が立っていた。

「……神の御加護が、あらんことを」

そう言つて、母親は息子の額に軽くキスをして、抱きしめた。

そのままの状態ですつといたかった子供だったが、すぐに離されてしまつて父親が歩み寄ってきた。

「お前なら、必ずできる。私たちの誇りであるお前なら。自分を信じて必ず生き延びるんだ」

そう言われて父親にもまた抱きしめられてすぐに離される。そして、

「さ、お行きなさい」

そう母親に声をかけられて、模様のほうへと背中を軽く押される。両親を時折振り返りながら少しずつ進み　模様の中央までやってきた。

すると温かい光が溢れ、子供の体を優しく抱擁するように包み込んだ。

その心地よさに身を任せていると、自分の体が縮んでいくような感じがし始め、

「！」

次の瞬間に建物が衝撃に揺れ、轟音が室内に響いた。

「……もう来たのか」

「そのようですね」

両親がそう小さく呟くのが聞こえる。自身を包んでいた光はもう無くなっていた。そして、大きな声で父親の声が聞こえる。

「何をしている、早く逃げるんだ！」

その声に驚いて、困ったように母親を見る。すると母親は子供に近づいて、首に何かを結びつけた。

「これは大事なものだから、絶対に無くさないようにしなさい」

悲しそうな、しかしまっすぐとした瞳で見つめられ、そう言われる。

その後先ほどと同じようにまた建物が揺れ、天井から埃がぱらぱらと落ちてくる。

そしてその音を引き金にするように、入口とは反対側にあった窓から身を投げ出して、夜の森へと逃げて行った。

第五話：Chat and blunder

「以上が、僕の呪い　僕の過去についての話です」

言い終わると、喋り疲れてしまったのか小さく、ふう、と溜息をついた。

「……………」

全てを聞き終えた向かいに座る老人は、何か考えているようでシアルが話し始めたときからずっと黙っている。

シアルもこれ以上話すことは特に思いつかないようで、老人の様子を窺いながらも沈黙している。その状態がしばらく続くと、またシアルから口を開いた。

「あの、……………」

そこまで言つて、まだ自分が老人の名を聞いていないことを思い出す。どうしようか迷っていると、

「ダグラスです」

「……………」あ、ありがとうございます」

戸惑うシアルを見越してか、問う前に名乗られてしまう。そして出鼻をくじかれてしまったシエルは椅子の上に座りなおして再び沈黙。

暖かい日の光に照らされてうとうとし始めていると、声をかけられる。

「話していただいて、ありがとうございました」

「……………」ふえっ、あ、いいえ、どういたしまして」

油断をしていたために突然声をかけられ驚いてしまい、変な声をあげてしまう。

「興味深かった話ですが……………」辛かったでしょうな……………」

「ええ、そうじゃないと言えば嘘になっちゃいますけどね」

苦笑しながら答える。

「でも、今の暮らしが大嫌いかというと……………」たぶん、そうじゃない

と思います。たしかに不便だったりするときもありますが、こんな姿だからこそできることもありますし」

その言葉に嘘偽りが無いことはその丸い、まっすぐな瞳を見るとよくわかった。

「お強いんですね……。ご両親があなたを信じていたことも、よくわかる気がします」

褒められると、子供らしい仕草で恥ずかしそうに頭をかく。

「そうですね？ 誰でも同じだと思いますけど……」

「そう思えることが、すごいのですよ。 さて、話を戻しますが、逃げ出した後はどうしたのですか？」

「あ、そうでした。えっと、この姿になったせいかなんとか逃げ切れて……言われたとおり、首輪に結んであった紙に書いてある人をめざしました」

そう言って自分の首に巻かれているものを肉球のついた前脚でぽんぽんと叩く。しかしそれは首輪というよりも首飾りに近いもので、結び目とは反対の場所に何かが付いていた。

「それは……？」

「逃げる直前にお母さんがくれたものなんですけど、見てみますか？」

自分の首から器用に取り外すと、ダグラスにそれを手渡す。ダグラスは色々な角度から見たり近づけたりして興味深そうに観察しながら口を開く。

「私のことはお気になさらず、話を続けてください」

「……はい、わかりました。それからその人の元になんとか辿りつけました。なんだか説明をする前から事情がわかっていたみたいでしばらくその人と一緒に暮らすことになりました」

「その方の名前は？」

相変わらず首飾りをいじりながらダグラスが問う。それに対し、「それは、悪いですけど言うことができません。ただ、それなりに有名だった魔法使いみたいです。それから……既にお亡くなりにな

りました」

思い出したのか懐かしそうに、悲しそうに、しかしきっぱりと答える。

「そうなのですか……」

「はい。僕はその人にたくさんのことを学びました。この姿でも生きていくための術やたくさん魔法など……きっと、あの人がいなければ僕は今まで生きていなかったと思います。そして、その人が亡くなった日から、この呪いを解くために旅を続けています」

「……」

ダグラスは何か言いかけるが結局何も言わず、代わりにシアルへと首飾りを差し出す。

「ありがとうございます……魔具であることはわかるのですが、その使い方などはわかりませんでした」

「魔具、だったのですか？」

受け取ったシアルは、再びそれを首につけながら聞く。聞かれたダグラスは、ええ、と答える。

「微かにですが、魔力を感じられます。その小ささから考えてあまり複雑な魔具ではないと思うのですが……」

シアルはそう言われると首にかけたその魔具を持ち上げて、目の前にもってきて見てみる。

先ほどまでダグラスがしていたように、色々な角度から観察してみたりするが、やっぱりわからない。

「もしよろしければ、私が預かって調べてみましょうか？」

そうダグラスは誘ってきたが、

「いいえ、これはお母さんが大切なものだと言って渡してくれたものです。なので、常に自分で持つておこうと決めています」

シアルはこう答えて断った。するとダグラスは微笑みながら言う。

「なるほど……たしかにそうしておくのが一番かもしれませんね。もし、その仕組みがおわかりになりましたらぜひお教えてください」

「はい、もちろんです。……それで、あの、ここに来た目的なんで

すけど……」

シアルの過去を知ると同時に、ダグラスはシアルがここに来た目的も理解していたようだ。

「残念ながら、私の蔵書にはあなたの呪いの解き方……というより、あなたの呪いについて触れることすらされていない本しかないと思います。この年にもなると、暇でしてね。どの本も数回は読んだものばかりなので内容についてはほとんど記憶しているですよ」

「そう……ですか」

その返事を聞くと、あからさまにがっかりとして肩を落としてしまふ。

「しかし、いい提案はあります」

「……？」

顔を上げて、ダグラスを正面から見つめるシアル。

「隣国シユーレに、魔法使いを養成するための学園があることはご存知ですか？」

その学園の話はシアルも聞いたことがあった。と、いうよりもかなり有名な学園であり、知らないもののほうが少ない。

「はい、知っています。たしか200年ほど前にできた学園って」

「その通りです。そして、その教師の方々はもちろんのこと、創立時から購入したり寄付された資料も相当なものでしょう」

「あ……！」

「お気づきになれましたか？ そう、生半可な図書館などよりかは調べ物をするのによっぽど適したところなのです」

「で、でも、そんな学園にこんな猫を入れてくれるのでしょうか」

そう言いながら自分の体をアピールさせるかのように動かす。

「生徒に見つかったりして目立ちたくもないですし、学園なら見張っているひとも多そうだし……」

「その点については心配なさらずに結構ですよ。私が学園長に紹介書を書いてさしあげますし、到着する前までに先に連絡をしておきます」

その言葉を聞き、しばんでいたシアルはどんどん元気になり、嬉しさを隠せないように尻尾を激しく振っている。

「あ、ありがとうございます！」そして思いっきりお辞儀をして反動で椅子の上から転げ落ちてしまふ。その様子を見て楽しそうに微笑んでいるダグラスは、

「いいえ、お礼を言われるほどのことはしていませんよ。私もあなたから色々と興味深いお話を聞くことができましたし」

痛そうに、しかし笑顔で頭をさすっているシアルを見ながら言葉を続ける。

「今日は、ここに泊って行きなさい。明日の朝にこの町を出発する馬車にでもこっそりと乗っていくといいでしょう」

「そんなにご迷惑をおかけしてもいいんですか……？」

「なに、そのお礼は他に何か面白いお話でもしていただければ、それで結構です」

につこりと笑いながらそう答えるダグラス。

「わかりましたっ！ 嫌になるくらい聞かせてあげます！」

そして、外見からはあまりわからない子供っぽさではしゃぐシアル。

久々に人間と会話して、更には泊めてもらえることとなり、嬉しいのだらう。

「おお、恐ろしい。それでは、それに見合うおもてなしをしなくてはなりませんね」

そう言いながらその準備をするためか、家の奥へと消えていくダグラスと、

「あ、お手伝いします！」

そのダグラスを追い掛けて一緒に居なくなるシアル。

そしてその日の夜、普段は早くに明かりが消えるその家は、夜分遅くまで楽しそうに会話する老人と少年の声と、窓から漏れる明かりが途絶えなかった

第六話：Correct prān, Choose prān

一台の馬車が、森の中を抜ける道をゆつくりと進んでいた。
人を運ぶ馬車ではなく　その幌に包まれただけの荷台には、様
々な荷物が積まれている。

昨日に引き続き天気恵まれており、荷台の前に座る御者は暖かい日光に当てられて居眠りをしてしまっていた。

指示する者が居なくともこの道は慣れているのか、はたまた一本道だからかはわからないが、馬は荷台を引いて進み続ける。

そんな平和な風景の中で、唯一変わった動きをしているものがあった。

それは荷台に存在し、御者と同じく眠ろうとしている。だが、馬車で人や荷物の運搬を生業としている御者と違い、馬車の揺れに慣れていないようでなかなか眠りにつけない様子であった。

ごろんと寝転がり睡眠の体勢ではいるものの、何度も寝返りを打っていたり、ようやく眠れそうというときにガタンと大きく揺れたりして起こされる。そんな悪循環を繰り返していた。

そしてその循環が両手の指では数えきれない数をちよつと超えたとき、ゆつくりと上半身を持ち上げた。

「まいったなあ、これじゃとても寝れないよ……」

そう言いつつ大きく欠伸をするその姿は、紛れもない白猫　シアルであった。

「ダグラスさん、全然寝かせてくれないんだもん……元氣ありすぎ……」

時は同じ日の早朝。馬車が出発した町の大通り。

「この馬車に乗っていけば、学園へと辿りつけるでしょう」

そう言いつつダグラスは大通りに停めてあった一台の馬車へと近

づく。

「そ、でひゆか……ふあああ……」

結局、ほぼ夜通しでダグラスと話してしまい、とても眠たそうにふらふらとした足取りでダグラスの指した馬車までやってくるシアル。

そんなシアルを軽く抱き上げると、傍の馬車の荷台へと乗せた。

そのままシアルはそこに寝転がる。

「ほんとにありがとございまひた……」

呂律が回っておらず瞼が半分ほど降りた目の状態で、それでも何とかお礼を述べる。

「いえいえ、お礼には及びませんよ」

そして若者と徹夜で話していた老人とは思えないような様子でダグラスは答える。

「そんなことよりも、これから頑張ってくださいね。馬車での移動とは言え、距離がありますし」

「ふあい……だいじよぶれす……」

相変わらず警戒心の欠片も感じさせないシアルだが、気にせずに続ける。

「何度も申しておりますが、お渡しした紹介書をあちらの学園の教員にお見せください」

「これでしゅねえ……」

そう答え、首飾りに結び付けられた紙を引っ張る。

「そうです。それさえすれば大丈夫ですので」

「わかりまひた……」

そしてダグラスは頷いて言う。

「学園には侵入者感知用の結界が張られているでしょうが、逆にそれを利用して出てきた教員に見せるといいでしょう。 それでは、そろそろお別れです」

話しているうちに大通りには少しずつ人が増え始めてきた。じきにこの馬車も出発することだろう。

「とても短い間でしたが、非常に楽しませていただきました」

「ぼくも、ですー……」

先ほどよりも瞼が降りてきており、半ば無意識にシアルは答える。
「それはよかったです。またいつかこのお話の続きをしましょうね。
では……道中お気をつけて」

「はい……だぐらしゅさんも……」

ほとんど寝ているシアルを見て最後に軽くその頭を撫でると、馬車から離れていくダグラス。

「……運命というものは、これだけ年をとっても本当にわからない
ものですね……」

最後にそう呟いたがその声は小さく、さらには既に寝てしまった
シアルの耳に届くはずはなかった。

と、いうわけで馬車に揺られて運ばれているシアルであったが、

「ねむい……ねむい……」

ぶつぶつと独り言を呟きながら馬車を恨めしそうに見ているその
姿は限りなく怪しい。勝手に乗っている以上、文句を言える立場で
はないのだが。

その様子を見ると、町を出発してからほとんど寝れていないよう
だ。そんなシアルを一切気にすることなく馬車は容赦なく揺れ続け、
進み続ける。

そして、寝れないで暇そうにしていたシアルが馬車から見える空
に時折現れる鳥の数を数えて暇を潰し、その空が徐々に赤くなり始
めた頃、

「ん？」

ずっと自分を苦しめ続けていた馬車の揺れが無くなっていったこと
に気づく。同時に、進行も止まっていたことがわかった。

「どうしたんだろ……？」

目的の学園にはまだ早すぎる。と、いうよりまだエンポリアとシ

ユーレの国境にすら到達していない。

耳を澄ますと、馬車の前のほうから話声が聞こえてくる。

「……え？」

その話の内容に驚いていると、馬車はまたゆっくりと動きだす。

しかしその進路は先ほどまでの道ではなく、別の町へと入るための大きな門だった。

「な、なんで？ 学園に行くんじゃないのー？」

当然の疑問ではあるが、それに答えるものもなく馬車は完全に門をくぐり終え……その門も閉じられてしまった。

「ダグラスさん……間違えちゃったのかなあ」

あの後、あの馬車が今日はこの町で1泊するということがわかった。最終的には学園の方向へと向かうようだが、こんなことは聞いていない。

「ま、いいか、今からいつぱい寝れるわけだし。……明日起きれなかったらやばいけど」

そう言いつつ眠るのに適した場所を探す。暗くなってきたので、首飾りをぶら下げた猫が塀の上を堂々と歩いても注目する人間はいない。

そしてしばらく歩いていると 薄暗い路地裏で話している二人の人間を見つけた。

ただの酔っ払いなどでは無いことは、その二人が緊張に包まれていることからわかる。

「……？」

その二人に、シアルはちょっとした興味本位からこっそりと近づいて盗み聞きをしようと試みる。

片方の人間が時折周囲を警戒するように視線を話している相手以外にも向けているが、気配を殺して、屋根の上に居る、人間ではなく猫のシアルに気づくはずもなかった。

更に猫の聴覚は人間のそれよりも遙かに優れたものであり、ある

程度近づいただけでその会話内容が聞き取ることができた。

そして、その会話を聞いていたシアルの顔がどんどん青ざめていく。

「なっ……」

その二人の会話は、シューレのとある町へオルガを用いての本格的な襲撃をかけるという内容であつたからだ。

その内容に驚きつつも、もっと詳しく聞こうと近づいてみるが、それはできなかった。

話しているうちの一人が、シアルに気づいてしまったからである。そして気づくと同時に何の躊躇いもなく杖を向ける。

「っ！」

それに気付いたシアルも一瞬驚きはしたものの、全力でその場から離れる。

「くそっ、まさかばれるなんて……！」

屋根の上を伝つて、時折下に降りたりしながら必死に逃げる。

しばらく走り続けた後、物陰に身を潜めて周囲を警戒するがどうやら追ってきてはいないようだ。

「ふう」

それに安心して、小さくため息をつく。しかし鼓動は相変わらず緊張で高鳴っている。

結局、詳しくは聞くことができなかったために襲撃される町を知るまでに留まつてしまった。

「学園に行く前に先に行かなきゃ……」

自分が行ったところで何ができるかわからない。もしかしたら何もできないかもしれない。

それでも、シアルは自分の身を危険に晒す道を簡単に選んだ。もともとこういうことを見過ごすことができない性格であつた。

「できる限り早く動けなくっちゃ……。とりあえずそっちに行く馬車を探して、今日はもうその中で寝ちゃえばいいか」

そう呟くと、自分がこっそりと乗るべき馬車を探すために警戒し

ながらそつと物陰から出てくる。

そして自分の安全を確認すると、夜の町へと駆け出して行った

第七話：Crusher's obstacle

「早く、早く着かないかなあ」

次の日、今度こそシューレにある襲撃が予定されている町　リ
ーネへと向かう馬車に乗り込んだシアルは落ち着かず狭い荷台の
中をうろろしながら一人呟く。

町を出た馬車は、事故もなくスムーズに、しかしあくまでゆっく
りと進んでいた。

「なんでこの馬車しか使えるのがなかったんだろう……」

ちなみに今乗っている馬車は正午に出た馬車であり、他の馬車を
探したもののシアルの目的地と一致する馬車がなかった。

「いつごろ襲撃されるのか聞けなかったのは痛いなあ。もうされて
たりしないよね……」

うろろろ。

「もし着いたときにもうなにもなかったらどうしよう……やっぱり
無視しちゃったほうがいいのかなあ」

うろろろろろ。

「でももし間に合ったら……うろろろ……」

そんな自問自答を何度も何度も繰り返すシアル。しかし最終的な
結論は毎回同じであった。

「や、やっぱり見捨てることなんてできないよね！　うん！」

そして日が傾き、空が赤く焼け始めたころ。

正午からとは言えそれから休みなしに進んでいるだけあり、かな
り道も進んできたころ。

「？」

暇そうに寝そべって尻尾をぱたぱたさせていたシアルがその身を
そっと起こす。

「なんだろ……なにか近づい」

そこまで声に出した直後、ほぼ反射的に馬車の荷台からその身を
外へと投げ出す。そして周囲を轟音と衝撃が包み込んだ。

その衝撃に吹き飛ばされそうになりながらも上手く地面に着地し、
馬車へと目を向ける。

「……！」

すると先ほどまで自分が乗っていた馬車には、今度はオルガが乗
っていた。荷台その他諸々を粉々にして。

どうやら上から踏みつぶしたらしく、その跳躍の反動を和らげる
ために膝関節に当たる箇所を曲げたまま固まっている。

そして辺りに埃や木片を撒き散らしながらゆっくりと脚を伸ばす
そのオルガから、搭乗者と思われる人間の声が聞こえてきた。

「回避したか。なかなかやるようだな、さすがは猫と言ったところ
か」

そしてシアルへと機体を向き直させる。

一見するだけでは二本脚で立ち、その先に胴体となる部分があり
その左右から両手となる部分が伸びている、オルガの中でもよく
あるタイプであった。

が、両手の先にはアームなどがついておらず、代わりに三角形に
しましま模様の物体、所謂ドリルが付いていた。

「我が名はダリオ、母国ティフォスに仕える軍人にして、無類のド
リル愛好家！ 国とドリルをこよなく愛する男だ！」

やや冷めた目で、しかし警戒を解かずにダリオと名乗った男の声
が聞こえるオルガを見ているシアル。

「最初の一撃こそ避けられはしたが、それまでだ。私と私のこの愛
機……ディアルドからは逃れられはしない」

そう言い放つと、なぜかいきなり両手のドリルを勢いよく回転さ
せながら振り回す。

「ぐあああつ！」

すると突然叫び声が聞こえてきた。どうやら、御者も潰されては
いなかったようだ。しかし今わざわざとどめをさしたらしい。

何が起きたのか全くわからずに死んでしまったに違いない。

「誰一人として！」

そして最後にそう叫ぶと共に、一直線に突っ込んでくる。対するシアルは、既に簡単な呪文の詠唱を完了していた。

初歩中の初歩である呪文。ほぼ全ての魔法使いが使用することができるであろう呪文。

「閃光^{クルス}」

そう呟くと、シアルとダリオの乗るオルガ、ディアルドの間で眩い光が突然現れた。

「ぐうつ……！？」

その明かりに怯んでいるうちにシアルはディアルドの側面と周りこみ、詠唱を開始する。

「我は願う。我は祈る。我は望む。聖なる力を以て、邪悪なる敵を打ち滅ぼさんことを！ 雷打^{サライク}！」

雷撃系では中級程の呪文。あわよくば感電してそのまま気絶してくれることを願い、雷をその隙だらけの機体へ向けて解き放つ。

だが、機体自体に電気が流れはしたものの、

「……その程度か？」

搭乗者までダメージは行き渡らなかったらしく何事もなかったかのようにまたこちらへと向かってくる。

「くそつ、やっぱ甘い、なっ！」

自虐的にそう言いながら、間一髪のところかわす。そのまま森に突っ込んだ機体は木を数本なぎ倒したところで止まり、また方向転換を始める。

「どうする……ただ強い魔法を当てるだけじゃ賭けになるし……」

そして再びシアルへと凶悪なドリルを向けながら突撃してくるダリオ。

「っ！」

今度は機体の下にうまく体を滑り込ませてなんとか回避する。ダリオも避けられるのをある程度予想していたのか、先ほどより

無駄のない動きで向き直る。

「どうした？ 避けることしかできないのか？」

そう挑発的な声をかけてくる。そしてそれに言葉を返さないシアルを見ると、続けて話す。

「喋れないわけではあるまい？ それとも、本当にもう何もできないのか？」

「……少し黙っててくれないかな。何かできないか考えているんだけど」

「おお……ようやく喋ってくれたな。しかし残念だが時間は与えん。もつと不思議な猫と話してはみたかったがな」

「ならさ、話しててあげるから時間くれないかな？」

「悪いが、任務を優先するのね。では行くぞ」

最後にそう言つと、両手のドリルを前に突き出し、低い姿勢となる。

「……一か八か！」

シアルも何か思いついたようで、ダリオに背を向けて詠唱をしながら全力で逃げる。

「生命の源となる水よ。太古より在りし水よ。我に呼応せよ。……
水呼！^{クォータ}」

最後は振り向き立ち止まり、しっかりと発動場所を特定するためにやや遅れてしまった。

「なんだ……？」

警戒してか、ダリオは何とか勢いを殺してその場に踏みとどまる。しかし、シアルが魔法の発動を指定した場所はダリオのディアルドではなく、

「たくさん水と呼んだだけだよ」

むしろシアルの近くの空中であった。当然、重力に逆らえずに多量の水は地面へと落下する。

そしてそれを見ながらさらに続けて詠唱を開始。できる限りばれないように、かつ素早く詠唱をする。

「何をいきなり……血迷ったか？」

もちろんそれには返事をしない。詠唱中だということがばれてしまいかもしれないが、気にしてはいられない。

「……まあいい、今度こそ最後だ」

構えをとかず、そのままシアルへ向けて加速するダリオだが、

「な、ああっ!？」

先ほどシアルが水を呼び出した地点まで来ると、不快な金属音をあげて突然停止する。自分の意思ではなく、無理矢理止められてしまった様子であった。

急いで状況を確認するとどうやら地面に脚がほぼ全部埋まってしまい身動きが取れなくなっているようだ。

「……ふう」

それを見て安心したのか溜息をつくシアル。

「貴様……何をした」

「んーと、『今度こそ最後だ』あたりでもう一度魔法を発動してただけど……気付かなかった？」

それにはダリオは気づいていた。しかし周りに変化が見えなかったこと、微弱な魔力反応だけだったために無視をしていた。

「無論気付いていたが？」

「その時にちよつと、いま埋まってるところの地下に細工を。水は柔らかくするために」

「馬鹿な……地下にこれだけの細工をするならばそれ相応の魔力が必要だろう」

「そのへんは秘密。ま、とにかく落とし穴みたいなのを作っただけだよ」

ここまで会話をしている間にもダリオは脱出しようと試みるが、その手先のドリルが災いして土を掘り返すばかりであった。

「というわけで、僕は逃げるから」

反対にシアルは先ほどの馬車の荷物を漁り役立つものがないか調べ、それも終わってしまい国境に向けて歩き出そうとしていた。

「……待て、貴様の名は何だ」

「そう言えば名前言ってなかったっけ。 シアルだよ」

「シアル……覚えておくぞ」

「もう会いたくないけど。……頑張ってね」

そう最後に言い残すと、必死にもがき続けるダリオとディアルドを尻目に返事も待たずにシアルは駆け出していった。

この襲撃でまだ町は襲われていないと確認し、戦闘の疲れを癒すこともせず。赤の他人であるリーネの人々を助けるために。

第八話：Cause of magic

薄く月明かりに照らされる森の中を通る道をシアルは進んでいた。空を見上げると、月には微かに雲がかかっておりぼんやりとした光が見えるだけであつた。

「……よし、追つてきてない」

ダリオとの戦闘が繰り広げられた場所からはもうかなり離れており、さらに追い掛けてくる気配もしないのでもう大丈夫だろうと安心する。

「ちよつと休もうかな、つと」

あれからずつと脚を動かし続けていたので相当疲れたのだろう。木にもたれかかると脚を投げ出すようにして座り込む。

「うう、馬車を壊されちゃったのはつらいなあ」

そう言いながら現在の自分の位置、ここからリーネまでの大体の距離を予測し、うなだれる。

「まだ結構ある……」

そして、先ほど自分を襲つた男を思い出す。

「さっきのダリオとかいうひとは何なんだろう……。やっぱり、昨日の町のひとたちの仲間かな」

そんな様子で考え込むシアルであつたが、

「まあ、今考えてても仕方ないよね……。先を急がなくなっちゃ」

そう言つと立ち上がり、先に進もうと歩き始める。

「んっ？」

そんなシアルに空から何か冷たいものが降つてきた。それは徐々に徐々に激しさを増していく。

「雨が……参つたなあ。今風邪でもひいたりしたら大変だ」

そして道から外れて木の下に戻つて先を急ぐ。しかしそれでも完全に防ぐことはできず、木の葉を伝つて落ちてくる水滴や風によって流された水滴が時折シアルの体を叩く。

先ほどまでぼんやりと輝いていた月はすっかり雲に隠れて見えなくなってしまうていた。

そうして進んでいたシアルだったが、体を包む白い毛がしつとりと濡れ始めたころ。

「あ……なんだろう」

道から外れた森の中に明かりを見つける。

「家、かな？　もしかしたら雨を防げるかもしれない」

すると、道に沿って歩いていていた脚をその明かりへと向ける。ここからでも明かりが見えるということは、そう遠くにはないだろう。

少し歩くと、すぐにその建物が見えてきた。人目をはばかるように、木々に隠れているその建物は小さい家だった。

軒下など、屋根のある場所を探そうとさらに近付いてみると、

「……おや？」

自分のものではない人の声が家の中からではなく外から聞こえてきた。できる限り自然に、本物の猫らしい動作でその声が聞こえてきた方を見る。

「迷い人ではなく、迷い猫かな？」

視線の先にはこの家の居住者であるう、一人の女性が立っていた。年齢は30歳ほどだろう。敵愾心や警戒心は見られない。

「おいでおいで」

そしてその場にしゃがみ込むと、シアルを手招きし、

「にゃー」

猫の鳴き真似をしながら、猫のふりをしながら近づいてきたシアルを抱き上げる。

「あらら、こんなに濡れちゃってるじゃないか」

「にゃう……」

「ふふ、そう悲しそうに鳴くな。拭いてあげるからな」

そう言つと、そのままシアルを連れて家の中へと入っていった。

「えっと……何か拭くものは……」

中へと入れられると、シアルは玄関脇にすぐ降ろされ、そこで家の中を歩きまわる女性を見ながら座って待っていた。

「あつたあつた。ほら、拭いてやるから我慢しな」

そして女性はタオルと思しき布を持ってきてすぐにシアルの元へと戻ってくる。そのままシアルの体に布を被せ、上からわしゃわしゃと拭きはじめる。

「暖かくなってきたけど、それでもこんなに濡れちゃったら風邪もひいちゃうぞ？」

「なう」

猫の真似のままだが、応えるようにして鳴く。

「よしよし。それにしても、ずいぶんと人に懐いている仔だね」

その言葉にやや動揺してしまうシアルだが、

「ん……？　なんだ、君は飼い猫か」

シアルについている首飾りを見ると、勝手にそう解釈してくれた。「あまり飼い主さんを心配させちゃだめだぞ……。よし、こんなものでいいかな」

最後にそう言うと、拭くのをやめる。まだ僅かに湿ってはいるものの、シアルの毛からだいぶん水分がなくなっていた。

「にゃ」

お礼を言うように、自分を拭いてくれた女性を見て一鳴きする。

「可愛い仔だね……。名前は何て言うんだい？」

「？」

しかしシアルはそれには応えず、何を言っているかわからない、といった様子で首をかしげる。

「わかるわけないか。私の名前はランカスターって言うんだ、よろしくな」

その様子を見ながら、年に比べるとやや若く綺麗な顔で笑いながらそう名乗った。

「今日はもう雨が止まないだろうから、ここで寝ちゃってもいいぞ。」

とは言っても、何もないけどな」

シアルも、今急いでいくよりもここでじっくり休んで雨が止み次第出発しようと考えて言葉に甘えることにした。

そしてそこで丸まって寝ようとしていたらランカスターが近づいてくる気配がした。

「あら、もう寝ちゃったのかい？　せつかくごはんを作ったのに」

その言葉に次いで自分の側に皿と思われる食器が置かれる音、やや空腹のシアルには耐えがたい香りが届いてきた。

「……にやう」

シアルはすぐに起き上がると、一度さりげなく女性に軽く礼をしながら用意されたものを食べ始める。

「食べちゃったら寝てもいいから。起こしちゃって悪かったな」

そう言いながらシアルの頭を優しく撫でると、少し離れた椅子に座って本を読み始めた。

心の中で人間の言葉でもすごく感謝しつつ、そのおいしいごはんを食べ終わる。そして空いていたお腹が満たされると、疲れも相まってすぐに眠くなってくる。

そして再びその場に丸くなると　　すぐにすやすやと寝息を立て始めた。

「……………」

何か考え事をしているのか、読んでいる本のページも捲らずに、空っぽになった食器も片付けずに、ランカスターはただじっとしていた。

次の日の早朝。まだ日が昇り始めたところで、ほとんどの人間が寝ているであろう時間。

シアルは窓から差し込む光に起こされると、そのまま窓から外を見て雨があがったこと、そしてランカスターがまだ寝ていることを確認する。

なるべく音を立てないようにそっと窓を開け、その隙間から家を

出る。そして最後に家の中へと向き直り、

「……ありがとうございます」

小さな、本当に小さな声でお礼を言うとまた静かに窓を閉め、朝の日差しに照らされて朝露が光る森の中を国境へと走り去っていった。

それから数時間が経ったころ。ランカスターは目覚め、ベッドの上で身を起こした。

そしてシアルがいなくなったことを確認すると、

「……どうなったかな、あの仔……」

一人さびしそうにぽつりと呟いた。

第九話：Chance or necessity

ランカスターの家を出てからだいぶ時間が経った。太陽は既に真上にまで昇り、お昼時を知らせていた。

そしてシアルは休まず進み続け、ようやく国境まで辿りついた。

「つかれた…… 本当につかれた」

そう言うシアルは国境に設置された検問所からやや離れたところに立つ木に登つてのんびりと休んでいた。

とは言っても、ただ休んでいるだけではなく、いかにして国境を越えようか考えているところであつた。

「同盟国だけど、さすがに国境は警備されてるなあ……」

エンポリアとシューレは険しい山岳によつて隔たれており、それに沿うようにして国境線がひかれていた。

その山岳地帯の、両側が崖になっている谷の間に検問所はあり、自然の防壁が密入国を防いでいた。

しかし、それでも標高が高い部分の山を登山してでも密入国しようとする賊は居ないわけではなく、そういった連中の対策として山々のところどころには物見やぐらが設置されていた。

やぐらには伝達魔法、またはそれに準ずる魔具が配備されており、いつでも情報の送受信が可能となっている。

そしてそういった物見やぐらは勿論のこと、今シアルが見ている関所にも魔法使いが待機しており、そう簡単には入れなくなっていた。

「やっぱり、本物の猫のふりをするしかないかなあ……」

そう結論付けると、木から慎重に地面まで降り立ち、今度はなるべく警戒心の強い猫を装って徐々に検問所まで近づく。

ある程度近づいたところで人々を警戒しているような素振りである場に座りこみ、できるだけ見つからずに行ける方法はないか思索

する。

「……………」

そして荷物満載の馬車を見て何か思いついたようで、森の中まで戻っていく。

そこで先ほどと同じような荷物を積んだ馬車を見つけると、その下へと猫らしい機敏な動きで滑り込んだ。

下に潜り込むことに成功した後はそのまま馬車と一緒にゆっくりと検問所まで進んでいく。

当然のように検閲がなされるが、荷物が多くてそちらに時間がかかり、また馬車の下はとも人が入り込めるようなスペースはないためか調べられることもなく、遂にシユーレへと入国することができた。

喜びを噛みしめながら、しばらく馬車の下に居続ける。そして、ある程度検問所から離れたところで飛び出して先を急ぐ。

「ここからなら急げば……今日中には辿りつくはず！」

ようやく見え始めた目的地を想像して力を取り戻したシアルは谷間の道を全力で駆け出していった。

それから更に数時間経過し、太陽が西に傾き始めたころ。

「あと少し……がんば、ろう……」

息も切れ切れになりながら、シアルはいよいよリーネのすぐ近くまで辿りついていた。

国境を越えてまではさすがに追っ手もくることはなく、今日は天候にも恵まれ、さらに昨晩はしっかりと食事と睡眠もとることができたのでかなり早いペースで来ることができた。

「そろそろ、見えてくるはず……」

へろへろになりながらも、その歩みは決して止めることはせず。

「あ、あれかな」

そしてその頑張りに応えるように、ようやくリーネが姿を現し始める。ここから見る限りでは火や煙などはあがっておらず、まだ襲

撃はなされていないように見える。

「よかった、間にあった、みたい。……もうひとふんばり！」

そう言くとペースを上げて町へと急ぐ。しかし、近づくにつれて異変に気付き始める。

確かに不審な煙はあがっていないし、人々の叫び声などが聞こえてくるわけではない。

だが、逆に煙がただの一つもあがっていないということや、町なら絶対にあるであろう人々の喧噪すら聞こえない。そう　静かすぎるのだ。

「まさか、まさか……」

最悪の事態を想定し、長旅で疲れた体も厭わずに町へと急ぐ。そして、その光景を目にしてしまう。

「そんな……！」

リーネは、既に崩壊していた。逃げたのか、それとも殺されたのか、動いている人間は全くおらず、既に動かなくなった人が時折倒れているだけであつた。

建物もほぼ全てのものが全壊しており、今ではただ元々町があつた場所には大量の瓦礫が転がるばかりである。

「間に合わなかつたんだ……」

その事実を認識し、意気消沈するシアル。しかしそれでも、

「……まだ、誰か生き残っている人がいるかもしれない」

その状況にただ絶望するだけではなく、少しでも良い方向に動くこと、歩みを止めることはしない。

優れた聴覚に全神経を注ぎこみ、どんな物音でも決して聞き逃さうとはせず、瓦礫に下敷きになっているかもしれない人に呼びかけながら進み続ける。

そうして生存者を捜してくシアルであつたが、意外にもあつてなく生きている人間を発見する。

「あれ……っ！」

しかしそれはこの町に住み襲撃から生き延びた人間ではなく、軍

服を着たものと、魔法使いらしいローブを纏った　襲撃者と思いき人間であった。

その姿を確認すると、反射的に近くにあった瓦礫の山の影へと隠れるシアル。

しばらくそのまま息を潜め、気配を殺してじっとしているが、襲撃者にはばれた様子はない。

できるだけゆつくりと、警戒心を最大限まで高めながら、瓦礫の影からそつと顔を出す。万が一の時に備えて、敵の戦力をしっかりと分析するために。

「人数は……魔法使いが2人、普通の兵士が3人、かな。片方はたいたことなさそうだけど……もう片方の魔法使いは……ちよつと手強そうだ」

次に、何をしているのかを知るために観察する。すると、その5人の他にもう一人動く人影があった。

どうやらこの人間は町の住人らしく、襲撃者たちに囲まれてその小さな体を細かく震わせていた。

そして、その人物を確認した時点でシアルは5人を相手に戦う覚悟を決めていた。

「まずはあの子を避難させなきゃいけないから……なんとかして少しでも離れさせて、できればその時にザコはまとめて……」

数で劣るからには不意打ちをしかけ、その差を縮めることから始めなくてはならない。

失敗は絶対に許されない以上、本気で作戦を考えなくてはいけないため、疲れを無視してできるだけ効率のよい作戦を練り上げていくシアル。

「よし、やろう」

そして作戦が決まったのか、淡々といつもと変わらぬ口調で呟くと、

「母なる大地、恵みの大地。時には生命を助け、時には生命を葬るこの大地よ。全てを受け入れ全てを支えしその偉大なる力、今我ら

の前に現れ、その力見せつけてみせよ！」
物陰に隠れたまま詠唱を始め、戦闘の引き金となる魔法を唱えた

第十話：Crucial encounter - 1

鬱蒼と茂る森の中。シアルは怪我をした身体で必死に走っていた。時折強く当たる葉や枝が細かい傷をさらにつけていく。

後続より迫る人の気配は二つ。やはり人間では機敏な上に小さい猫にはなかなか追いつけないらしく、怪我をしながらでもなんとか逃げ続けることができた。

そしてシアルは逃げながら考える。追っ手が発動する魔法を時にかわし、時に受け流しながら、いかにして追ってくる二人に勝つことができるかを。

「力を見せつけてみせよ！ 地蝕！」
ストラスベルグ

その呪文を唱え、十秒ほど経過すると周囲を地響きが包み込む。しかしそこまで大規模なものではなく、低い音と細かい大地の揺れがしばらく続いた。

「……地震か？」

「わからん。だが何にせよ気をつけておけ」

やや離れた位置にいるシアルにそんな声が聞こえてくる。そして次の瞬間、

「うわっ！」

「な、なんだ？」

襲撃者たちが集まっている場所からさらにシアルから離れた位置にあった家の瓦礫が突然地中に沈んだ。

魔法を使えないであろう三人の兵たちは地震やそれに伴う地盤沈下だと思い込んでいるようだ。

しかし二人だけいる魔法使いは魔法を発動すると共に発せられる魔力を僅かながら感じおっており、やや周囲を警戒している。

「いったいどうしちゃったんだろっなあ」

「よくわからんけど、俺たちも巻き込まれないようにしないと」
そう言いながら帰還準備をしようとする兵達だが、

「……おい、お前達であそこを調べてこい」
そう魔法使いに命令されて落胆する。

「ああいうところに近づくのは危ないっすよー」

「そうですよ。目的のものも手に入っだし、早く帰りましょうよー」
危険な目に遭いたくないのか、やる気なさそうに反論する。

「何かはわからんが、少し嫌な予感がする。それさえしてくれば早急に帰還しよう」

しかし有無を言わさぬその言葉を受け、渋々と言われたとおりに動き出す。

「一般兵だけか……十分だね」

それを見ながら、新たに詠唱を唱え始めるシアル。

「暗黒に在りし眩いまでの光よ、我が呼びかけに応えろ。そして戒めるがいい、悪しき者を、邪悪なる者を。強大なる天よりの一撃、
ここに見舞わん。サンガラム迅雷」

呪文を唱えた瞬間、空から落ちてきた巨大な雷が魔法使いから離れた兵士に直撃した。

糸が切れたように崩れ落ちる兵。そしてある程度予想していたであろう魔法使い達は障壁を展開しつつ、それぞれ別の方向に飛び退る。

「やはり敵か？」

「ああ……そう見て間違いはないだろう。心してかかれ」

そうして臨戦態勢には入るものの、それから何も起きない。先ほどまで感じられていた筈の魔力も感じられない。

兵士が倒れている方向、つまりシアルとは反対側の方向を見つめながら二人の魔法使いは話す。

「逃げた、のか……？」

「わからん。我々二人を相手にすることはできないと思うのも無理はないかもしれんが」

「どうする」

「もうしばらく待て。それでも攻撃と見られるものがなければ早急に帰還するぞ」

「了解した」

会話が終わると、握っていた杖を握り直しいつでも攻撃できるように警戒しつつ準備をしておく二人の魔法使い。

「だめだよー。攻撃があつた方向だけじゃなくって全方向を注意しとかなきゃー……と」

物陰でのんびりとそんなことを一人喋っているシアル。そして今度は魔法使いではなく、捕らえられている人間を見る。

「よしよし……これなら大丈夫だね。 閃光^{クルス}」

身体の中で存分に、しっかりと練り上げた魔力を解放し、強烈な閃光を魔法使いの視線の先に放つ。もう魔力を隠す必要もない。

「うあっ!?!」

「これは……!」

暗くなり始めていた世界に目を慣らしていた二人にその閃光はあまりに厳しかったらしく、目を押さえてその場に蹲る。

それを確認したシアルは何の躊躇いも見せずに一人残された人間の元へと向かう。

そして音もなくその人間を拘束していた縄や目隠しを切り裂いて外した。

「ねえ、大丈夫? 走れる?」

そう問いかけるものの、

「……ん」

小さくうめき声のようなものをあげるだけで返事はない。しかし顔を動かして黒い瞳で自分に声をかけてきたものを見る。

「……………」

何も喋りはしないが、どうやら驚いているらしい。そしてその顔からその人間は少女だということがわかった。

「だめかあ……。やっぱり結局実力行使になっちゃうんだ……………」

その一連の動作から、どうやらこの少女は立ち上がれないもののだと判断するシアル。

「おい……貴様何者だ？」

「話には聞いていたが、本当に居るとはな」

そしてゆっくりとその声が聞こえてきた方向に目を向ける。目が回復したであろう魔法使い達がこちらを威嚇するように見つめていた。

恐らく人語を操る猫など初めて見るのだろう。その目には敵愾心と共に、純粹な驚きの感情も混ざっていた。

「答える義理はないよ……っ」と

そう言い残し、相手にする気などないとも言わんばかりにさっさとその場から立ち去る。

その行動に敵の魔法使いはまた驚いたようだが、すぐに気を取り直して背後から攻撃を加えようとしてくる。

「ま、待て！」

しかし、障壁に攻撃が阻まれたのを見ると、その声と共に攻撃が止む。

その声はシアルに対してではなく、敵の一人が片割れに対して発した言葉であった。

「ここで戦うと入手したものに被害が及ぶかもしれん。せつかく逃げてくれているのだから追ってから叩くぞ」

そう言い放つと、逃げ去るシアルの追跡を開始する二人。

捕らえられた少女は、自分に起きたことがわからずにただ一人ぽつんと取り残されていた

第十一話：Crucial encounter - 2

「よし……着いてきてる」

振り返って後ろを見てみると、思惑通り二人の魔法使いは自分を追い掛けてきている。

「戦うのはいやだけど、こうなったら覚悟を決めなきゃ」

そう言うのと、一気に加速して森の中にその身を投じる。そして隠れる必要もないと言わんばかりに魔力を解放する。

それだけ目立つように魔力を解放すれば森の中にいようが居場所は丸わかりであり、自分に向けて魔法が発動するのを感じ取った。すかさずその場所から、挟撃するために散会したと思われる二人の敵の間へと移動する。

先ほどまで居た場所には炎系の魔法が放たれ、木々を燃やしていた。

二人の間にやや距離があり、その上その間に強い魔力が存在するせいか互いの位置が掴みにくくなり、

「……よっ！」

それぞれの敵の向こう側にそれぞれの仲間が居るともわからずにシアルへとまた攻撃を加える。

シアルはその攻撃を最低限の障壁を展開して半ば受け流すように防御をする。

すると、森に阻まれてあまりはつきりとは聞き取れないが呻き声のようなものが聞こえてきた。

「成功、かな？」

そう呟くと解放していた魔力を一気に体内へと抑え込み、敵が自分を捕捉しにくくする。

そして魔力感知に加えて、人間である敵にとっては森の中でほとんど機能しない視覚や聴覚も使用して二人の捕捉を開始する。

「二人……固まったみたいだね。　予想通り！」

敵の位置を確認すると、詠唱を開始する。二人同時に倒すことができる、広範囲かつ強大な威力を持つ魔法を発動させるために。そのような魔法ともなると、詠唱も長引いてしまい敵に感知される可能性も出てくるが少なくとも一人は倒せるだろう。

そう思い、魔力を徐々に開放しつつ詠唱をし魔法を発動させようとすると、

「そこか」

突然近くの茂みからそんな声が聞こえ、風を裂いて自分に向かって何かが飛んでくる音がした。

仕方なく魔法を発動することを断念させ、反射的に左へと身を捻って投げる。

「うあつ……！」

直撃は免れたものの、後ろ脚を敵が放ったと思われる魔法によって浅く切り裂かれる。

よろけつつも、なんとか地面に着地して声が聞こえてきた方向を睨む。すると、二人いる敵の一人がゆっくりと自分に向かって歩いてくるのが見えた。

自分の目を疑いつつも先ほどまで敵が二人いるはずの場所に注意を向けると、

「……！」

二人分あったはずの気配は、一人になっていた。そしてその気配もこちらに近づきつつあり 既に出てきている敵の後方に現れた。「何が起きているかわからないようだな。まあ、無理もない」

「まさか、三人いたりしたの？」

そうシアルが答えると小さく笑い、

「近からず遠からず、と言ったところだな。三人目は私が魔力と丹精を込めて作った幻影だよ」

あつさりと答えを漏らす。もはや勝利を確信しているのだろう。

「その後はできる限り魔力を抑えて潜んでいたわけだ。物事があまりに上手くいったことに疑問を感じなかったのか？」

その油断からか、とどめも刺さずにぺらぺらと必要のないことを喋り続ける。

「君の行動からある程度の予測はついていた。結局君は最後まで私たちに踊らされていたわけだ」

そしてシアルは黙って敵の話を聞くふりをしながら少しずつ、ばれないように足元のほうへ魔力を送りこむ。

「そういうわけだ。名も知らぬ喋る猫よ、実に興味深くはあるが……私たちの邪魔立てをする者は死んでもらおう」

敵の一人がそう言い終わるのとほぼ同時に、シアルの足元で小さい爆発音のようなものが聞こえその小さな身体が宙を舞う。

そしてそこから離れた位置にある木の中にぽすつ、と間抜けな音を立てて落下する。

「なんだ？ いやに早く攻撃をするな」

先ほどまで長々と喋っていた男が仲間の魔法使いにそう話しかけるが、

「……私は何もしていないが？」

その言葉を聞くと目を見開き足早にシアルが消えた地点へと向かう。

「くそっ、おい！早く来い！」

呼ばれた男がそこまで行ってみると、シアルの姿はどこにもなかった。その代わりに、男達が立つ場所から反対方向に逃げるように点々と血痕が残されていた。

「あれは奴が逃げるために発動した魔法のようだ」

「な、それなら早く」

「ああ、怪我もしているしすぐに追いつけるだろう。早く追っぞ」
仲間の発言を遮るように喋ると、血痕を辿って暗い森の中を進み始めた。

その二人よりやや離れたところ。怪我をした後ろ脚を辛そうに動かしながらなんとか逃げ続けているシアルがいた。

「どうし、よう……このままじゃ、じきに追いつかれる……！」

息も切れ切れにそう呟く。

やはり逃亡を止めて迎え撃つしかないのだろう。しかし、こんな状態では罾などを作っている余裕もない。

そして簡単には防げないような強力な呪文を唱えるにも詠唱している時間もない。

戦略を練ろうにも、疲労し、更には怪我までしている身体ではまともに頭が働かない。

「……やるしかないか！」

残された道は唯一つ　真っ向から、小細工もなしにぶつかって勝つことだけだ。成功する可能性は少ないが、0ではない。

そう決意すると、その場で足を止めて魔力を全開に引き出す。相手もそれに気付いたのかそれ以上は近づいてこずにその場で即座に詠唱を開始したようだ。

痛みも疲れも無視し、ひとつの魔法を唱えるということだけに全てを注ぎこむ。死なせてしまいかもしれないが、そんなことを気にしてはられるはずもなく。

双方とも闇が降りた森に阻まれて姿も見えぬ相手に、されど魔力を感じるにより十分すぎるほど位置がわかる相手に、惜しみなく魔力を引き出し、丁寧に練り上げていき　同時に魔法を発動させる。

その瞬間、森の静寂を、文字通り引き裂きながら互いの魔法が衝突する。あまりに大きい衝撃と轟音にまともに立っておられずに目を瞑り、それでも放った魔法に魔力を注ぎながら、ふんばって耐える。

そして永遠とも思われるような短い時間が過ぎ去り、再び静かになった森に立っていたのは、

「やったあ……」

シアルであった。そして溜息をつくと、最早立っているのも辛いのかその場にごろんと大の字になるように寝転がる。

休んだらさっきの子のところに戻ってなんとかして助けてあげなくちゃ……などと考え、瞼を閉じて眠ろうとすると、

「っ！？」

自分の身体に激痛が走り、一気に目を醒めさせられる。何者かに身体を思いきり踏みつけられたようだ。

「まさか、あれほどだとはな……！」

そして自分に声をかけた主の姿を確認する。自分を今踏んでいるのは敵の内の一人であった。仲間はおらず、この男もかなり深い傷を負っているようだ。

「な、んで……！」

圧迫されて空気が抜けた肺に必死に空気を戻しながら何とか声を紡ぎだす。

「あのまま魔法で対抗していてもどうなるかわからなかったのな、仲間を身代わりにして私は助かった」

そう言いながら、同時に徐々に足に込める力を強くしていく。

「油断したのが悪かったな。これなら詠唱もできないだろう、このまま窒息死させてやる」

そして一際強く足を押しこんでくる。小さい猫の身体にその負担は凄まじいもので、最早喋るどころか呼吸もすることができずに必死にもがく。

しかしいくら抵抗をしても自分を踏む足は残酷にも動くことはなく、徐々にシアルの意識が遠退いていく。

遂に意識が完全に途絶えてしまう寸前、ずっと胸が軽くなった気がしたが、そんなことを気にすることもなく 闇がシアルの意識を完全に包み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927e/>

C's

2010年12月13日18時06分発行